

おわりに

山里 一成

今回行った教材研究では、作品の成立や作者についてはもちろん、一文から読み取れることを、各グループで深めていった。対象とした教材は誰もが知っているような教材から、記憶が少し曖昧な教材まで様々であったが、教材研究という視点から改めて文章を解釈していくと多くの発見が得られた。

その一つの要因として、意見交流が挙げられる。教材研究というと、個人で作品の分析を行うことが今まで多かったように思う。また校種によっては、実際の教育現場において教材の研究を行う時間も確保することが難しくなっていくだろう。そんな中複数人で意見の交流を行い、教材の研究を行ったことは多くの気づきをもたらしてくれた。

例えば、『大造じいさんとがん』の「ガンの頭領らしい」「いかにも頭領らしい」という二ヶ所の「らしい」の解釈がそうだった。一文読みを進めていく上で「らしい」などの言葉は、当然検討の対象となるのだが、私一人で解釈を進めていただけでは「ふさわしい」という意味に解釈するにとどまってしまっていた。もちろん伝聞などの意味も検討してはいたのだが、私の主観が先行してしまい伝聞の可能性を示す根拠を探すことを怠ってしまったのである。そんなとき、グループのメンバーや授業の受講者との話し合いの中で、私自身から見るとより客観的な意見が出ること多くの気づきにつながっていった。

ある作品を百人が読んで百人ともが同じ解釈になることはない。それは読み手の注目する点、性格や人生経験、あるいは必要と感ぜず読み飛ばしてしまうということも関係してくるだろう。様々な要因があり、それぞれの解釈が生まれていく。それは当然のことである。大切なのはそれぞれの意見を共有すること、自分の意見とは違う意見を聞くこと、そしてそれをおもしろいと思えることだと今回の教材研究を通じて感じた。

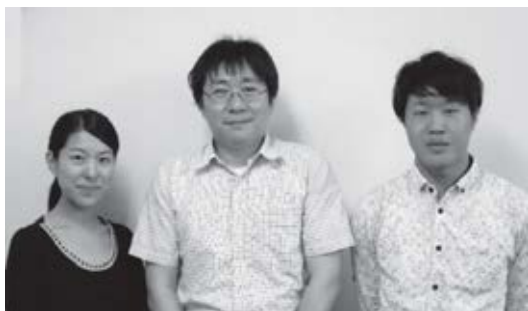
教育現場において、教科書に掲載されている文学作品に対して一つの共通した解釈を求めざるを得ないことが多々あるだろう。実際的な問題として、例えば、教員がテストを作成しなければならぬことや、受験、教えるように定められていることなど、挙げればきりがなく、解釈を統一せざるを得ない状況があることはもちろん分かる。

しかし、そんな中でもそれぞれの解釈を大切にしていきたい。解釈を統一するだけではなく、解釈の多様さに触れていく経験を大事にしたい。そのように本授業を通じて感じた。

子どもから大人まで誰しも、読書をすることはあるだろう。それが絵本であったり、SF小説であったり、文学作品であったり、はたまたライト



2013 年度担当者



2014 年度担当者

ノベルであるかもしれない。読書離れとは言われながらも、個人で好きな本を読むということを多くの人間が楽しんでいるように思う。しかし、複数の人間が同じ作品を読む機会というのは学校教育現場以外の場所ではなかなかない。そんな貴重な時間に解釈の違いを楽しむ経験を是非してほしいと思う。

本書を手にとっていたいた方々が様々な解釈に触れ、楽しみ、また役立てていただけることがあれば幸いである。最後に本書の発案者であり、全ての研究を監修してくださった寺田守先生に感謝の意を捧げる。

執筆者

浅野真実
有川梨沙
池田由季乃
石川奈緒美
伊藤直毅
井上小夜
井上智香
居林奈津実
今中祐希
上田慎也
梅本航希
大橋実華
岡崎隆祥
尾白いくみ
小幡千尋
表里美
梶隼一郎
亀井華
河合遼太
河南希
金伽耶

栗村隆太郎
紺谷篤
佐々木智美
里見凌佑
椎葉一勲
島本明日香
白井沙也加
高宮奈巳
田尻愛里紗
寺田守
鄧立新
堂前汐里
中口喬碩
西岡笑美
野田千鶴
初田美紀
波部真亜子
濱地桃歌
林禎之
伴太貴
船越香織

細川智樹
松岡柊人
宮川恵実子
宮坂綾乃
宮本あゆみ
村上公崇
元川姿耶子
森本美乃里
山内貴弘
山里一成
山根夕佳
山本賢史
吉川美那子
吉田衣織
吉田紘士
吉田美優
若杉良
和田睦美
渡部彬

文学教材の解釈 二〇一四

編著 寺田 守

発行 二〇一四年九月一日 初版 発行

発行者 寺田 守

発行所 京都教育大学国語教育研究会

〒六一二―八五二二 京都市伏見区深草藤森町一

京都教育大学教育学部 国語教育研究室

電話 〇七五―六四四―八二三五

メール mterada@kyokyo-u.ac.jp

印刷・製本 株式会社 田中プリント